

KHIS



NEWS LETTER

甲南大学人間科学研究所
Konan Institute of Human Sciences



2005
Vol. **07**

甲南大学人間科学研究所では、「育てることの困難」をテーマのひとつに据えています。

来年度の公開シンポジウム開催に向けて、高石恭子氏を中心に、本格的に取り組みだしました。

近年の日本では、親による子どもへの虐待、子どもによる親殺しなどの事件が日々報道されています。

今、育てる・育てられる関係にどんな問題が起こっているのでしょうか。

そして、それに対して私たちはどう向き合っていくべきなのでしょう。

研究所では、30年以上にわたって母子臨床を実践・研究してきた甲南大学の伝統を、継承・発展させながら、

幅広い年齢層の子どもを対象に、多角的に親子関係を見つめていきます。

さらに、子育てや母性の問題と直結する他のテーマ（性的差異、戦後効率主義など）と

交叉させることを目指しています。

ニュースレター第7号では、本テーマの第一回目の研究会の様様と、

カウンセリングルームが中心となって行っている子育て支援活動の様子をお伝えします。

母子臨床の実践と研究から見た子育て環境の変遷

— 変わるもの、変わらないもの



講 師: 松尾 恒子
(甲南大学名誉教授/臨床心理学)
指定討論: 穂刈 千恵
(甲南大学/臨床心理学・ユング心理学)
企画・司会: 高石 恭子
(甲南大学/臨床心理学・学生相談)
日 時: 2005年9月26日(月)
場 所: 18号館3階 講演室

育 てることの困難のテーマの出発点となるこの研究会では、本学における母子臨床の実践と研究の礎をつくった松尾恒子氏を講師に迎えました。今回は、その経験をふりかえりながら、母性の発露と母子関係の自然な育みを実現させる環境について論じていただきました。

松尾氏はまず、氏が初期に関わった三歳児を紹介されました。氏は、言葉が出ず自閉的なその子どもに寄り添い、声かけをし、また母親にも、子どもに身体的に働きかけるようアドバイスしました。その結果、半年ほどで子どもは声が出るようになりました。30年前といえば、子どもの自立を促すことを是とする新しい育児観が出てきた頃です。育児書は「抱き癖をつけるな」「いつまでも母乳をやるな」といった指導をしました。一方で「抱くことが大事」という意見もあり、母親たちには混乱が生じていました。また、高石氏の補足によると、たとえば自閉症の原因も脳科学的に探られ、脳機能障害だから薬物で治療しようとする科学的発想の時代が続きました。このように、子どもの発育にとって重要な母子関係についての理解や認識が不十分であいまいな状況のなか、松尾氏は、スキンシップの重要性を多くの経験から確信するようになり、「障害のあるなしにかかわらず、どの子どももありのまま受け、普通に育てること」を基本原則としていきました。

ところが、近年の変化として、アドバイスをして抱くことができない母親が増えているようです。松尾氏は、その要因のひとつを母子関係の出発点に見出しています。戦後の近代科学医療では、分娩後すぐに母子を引き離してきました。しかし生後数日間の母子の触れあい・刺激・情報のやりとりによって、母性本能を引き出すホルモンが分泌され、また赤ん坊にも抵抗力が生まれます。分娩直後から母子を一体にして、母子の身体的・心理的協調性を育むことにより、後々の子育ての困難を乗り越えていくことが「より容易になる」と考えられ

ます。日本ではまだ少数ですが、助産師主導の分娩を実践している産婦人科医も出始めています。研究会では、家族全員が立ち会う分娩風景を取材したTV番組が紹介されました。

もちろん母子関係の不具合は、出発点にのみ起因するわけではありません。松尾氏が中心となって甲南大学で行った子育て調査[対象: 東灘区の乳幼児をもつ母親(2000)、父親(2001)、祖母(2002)]の結果をもとに、その背景を探られました。それによると、母子関係は、家族関係や母親と社会との関係に左右されます。つまり、自分にとって望ましい人間関係を形成できている母親は、母子関係も良好なのです。これは当然の結果といえますが、実態として数値化し明示することが、地域や国の子育て支援のあり方が決定されていく上で重要となります。単に保育施設を充実させればよいわけではありません。子どもを取り巻く環境とは、子どもを取り巻く人間関係にほかならないのです。

以上の講義をうけ、まず穂刈千恵氏より、「世論調査とは違う、臨床心理士が行う調査であることの特性を生かしながら、データを分析し、うまく社会に発信していくことが重要」「家族立ち会いの分娩で生じた絆が、その後の家族関係の足かせとなることもある。単に‘自然がよい’とは言えず、文化的・社会的変化を踏まえねばならない」「現代は‘子育てが難しい’と感じるほうがノーマルになり、逆転現象が起こっているのでは?」などのコメントがありました。さらにフロアから質疑がなされ、活発な議論が展開しました。今回の研究会では、「現代の子育て状況」も、「望ましい家族関係」も、一筋縄では捉えられないことが浮き彫りになり、今後の子育て調査・支援において、また、成長期の子どもすべてを対象とした「子育ての困難」に取り組むことにおいて、柔軟で広い視野が必要であると認識されました。

子育て支援プログラム



共 催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
コーディネーター：仁木 智子
(甲南大学心理臨床カウンセリングルーム/臨床心理学)
日 時：親子相談 授業期間中の第2・4水曜日
うりぼうくらぶ 授業期間中の第2・4火曜日
※要予約。078-453-6104
(カウンセリングセンター事務室)
場 所：18号館3階

甲 南大学心理臨床カウンセリングルームでは、人間科学研究所との共同事業として子育て支援プログラムを実施しています。活動内容は主に4つあります。子どもの心理面や発達面・子どもへの関わり方等について、親子で気軽に相談に訪れることのできる窓口として「親子相談」、地域に開かれた交流の場・遊びの場としての「うりぼうくらぶ(親と子の遊びの教室)」、親同士のグループワークと子ども達の遊びのグループを行なう「子育てサークルまつぼっくり&プレイグループどんぐり」、松尾恒子名誉教授による「子育て講演会」と、複数のメニューを設け、それぞれ就学前の乳幼児と保護者を対象に、年間合わせて60回程行なっています。今年で6年目を迎えますが、プログラム開催日は子ども達の元気な声が18号館に溢れます。

めざしているのは、現代における親と子を支える必要性を踏まえ、臨床心理学のフィールドからの子育て支援を実践していくことです。あたりまえのように子どもを産み、あたりまえのように家庭と地域で子どもを育てていくことが、現代は容易でない時代かもしれません。それだけに乳幼児期という早期の支援が大切だと考えています。この時期の子育てにおいて、親は幾度となくピンチを迎える可能性を多分にはらんでいます。一方でそれらのピンチをチャンスに変えていく可能性にも満ちた時期であることを、たくさんの親子との日々の関わり合いから痛感するからです。その可能性が開かれるよう努めること、それこそが私達の最も大切にしていることと言えるでしょう。そのためにも個々の親と子の関係を尊重し、育ちゆく過程をポジティブな視点で支えられるよう心がけています。今ここにある問題ではなく、これからの可能性に目を向けていくことにより、親と子が自らの持つ力に気づいていくということは、臨床心理学の大事な視点です。

またこうした活動には、臨床心理士をめざし臨床心理学を学ぶ大

学院生がスタッフとして参加し、子育て支援や地域援助に関する研修の場としても機能しています。何よりありがたいと思うのは、こうしたフレッシュなスタッフの雰囲気や関わりを、参加している親子が心地よいものと感じ、評価してくれていることです。以前「うりぼうくらぶ」において、「参加するにあたってどのような要素を重視していますか」というアンケートを実施したことがあります。すると多かった回答は、「スタッフの雰囲気、関わり方」で、具体的には「子どもを見守る目」について触れているものが数多くありました。これには、支援要素における人的環境の重要性を改めて教えられました。

近年、「子育て支援」という言葉がやや冗濫気味のように感じます。掲げる側にとって、とても便利な言葉なのでしょう。それだけに、もう一度この言葉の意味を問い直す時期に来ているのかもしれない。そしてまた、こんな時代だからと悲観的になったり、かつての子育て環境をノスタルジックに回顧するだけでなく、現代という土壌を踏まえた子育て支援を、今を生きる親子は必要としているように思います。

これからもまた、「臨床心理学の知見を生かした現代の子育て支援」について、実践を通して模索し続けることで、地域社会に貢献していきたいと願っています。



※これまでの活動

2005年6月～2005年9月

公開シンポジウム

第6回 花の命・人の命

——震災10周年を記念して生命(いのち)を考える

日時：2005年7月24日(日)1:00pm～5:30pm
場所：甲南大学 5号館511教室
共催：兵庫県立淡路景観園芸学校
シンポジスト：田中 修(甲南大学/植物生理学)
岩城 見一
(京都国立近代美術館/美学・芸術学)
高阪 薫
(甲南大学/近代日本文学・沖縄文学)
浅野 房世
(兵庫県立大学・兵庫県立淡路景観園芸学校
/園芸療法)
川戸 圓
(大阪府立大学/臨床心理学・ユング心理学)
指定討論：加藤 清(隈病院/精神医学)
斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)
司 会：森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
企 画：斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)

研究会

第21回 〈曼荼羅〉としての花

——花のイメージの多様性とその変容のプロセス

日時：2005年6月17日(金)
講師：川戸 圓
(大阪府立大学/臨床心理学・ユング心理学)
企画・司会：斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)

第22回 母子臨床の実践と研究から見た 子育て環境の変遷

——変わるもの、変わらないもの

日時：2005年9月26日(月)
講師：松尾 恒子(甲南大学名誉教授/臨床心理学)
指定討論：穂苅 千恵(甲南大学/臨床心理学・ユング心理学)
企画・司会：高石 恭子(甲南大学/臨床心理学・学生相談)

※これからの活動

出版事業

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知6

『共振——花の命・人の命』(仮題)

編 者：斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)
執筆 者：浅野 房世
(兵庫県立大学・兵庫県立淡路景観園芸学校/園芸療法)
岩城 見一(京都国立近代美術館/美学・芸術学)
加藤 清(隈病院/精神医学)
金関 猛(岡山大学/比較文化学)
川戸 圓
(大阪府立大学/臨床心理学・ユング心理学)
高阪 薫(甲南大学/近代日本文学)
田中 修(甲南大学/植物生理学)
服部 正(兵庫県立美術館/西洋美術史学)
斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知7

『心と身体の世界化』(仮題)

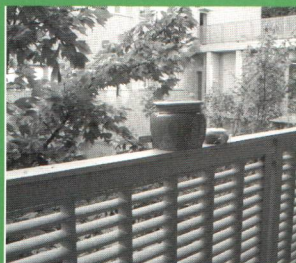
編 者：港道 隆(甲南大学/哲学)
執筆 者：秋元 孝文(甲南大学/アメリカ文学)
石原 みどり
(甲南大学人間科学研究所/美学・芸術学)
川畑 直人(京都文教大学/精神分析学)
小林 コリン(美術家・市民運動家)
田口 哲也(同志社大学/比較文化論)
西 欣也(甲南大学/文学・芸術理論)
増田 一夫(東京大学/フランス思想)
港道 隆(甲南大学/哲学)

以上2巻は2006年2月頃 人文書院より出版予定

公開シンポジウム

第7回 育てることの困難(仮題)

企 画：高石 恭子(甲南大学/臨床心理学・学生相談)
日 時：2006年夏 開催予定



【編集後記】

秋が深まってきました。写真は堺のくすみ餅の壺と箱根の温泉饅頭。秋の澄んだ青い空を見ながらおいしい和菓子と熱いお茶をいただくのは、なかなか幸せな時間です。さて、この秋からスタートした新しい研究テーマ「育てることの困難」。「育つ」「育てる」は多くの方にとって関心のあるテーマではないでしょうか。新しい研究テーマが、この甲南大学という土壤で実り多いものに育っていきますよう、ご支援ください。